View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kobe Shoin Women's University Repository KARASHI-DANE

Kobe Shoin Women's University Repository
KARASHI-DANE

人は皆或る時は詩の人なり ： 神戸松蔭女子学院大学所蔵幸田露伴関係資料

著者	青木 稔称
雑誌名	文林
巻	43
ページ	35-62
発行年	2009-03-10
URL	http://doi.org/10.14946/00001582

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

人は皆或る時は詩の人なり

――神戸松蔭女子学院大学所蔵幸田露伴関係資料――

青木稔弥

神戸松蔭女子学院大学に所蔵する幸田露伴関係資料のうち、今回は、「短詩」関係の一端を紹介する。(1)

明治三十八年八月二十四日の読売新聞に掲載された社告「九月以後の読売新聞」は、「九月以後の読売新聞は更に紙面の刷新を行ひ、左の記事を掲載すべし」として、その冒頭に「新短詩」を掲げる。

これ露伴氏新案の一詩形にして、従来の小説、漢詩、和歌、俳句、新体詩以外、別に文壇の新領土を開拓するもの、露伴氏自ら作例を示しつゝ、其の門下の新作及び満天下の投書を募るべし、文壇に志あるの青年は須くこの新領域に入り来れ。(九月一日より掲載)

露伴全集第四十一巻(昭和三十三年七月二十五日第一刷、昭和五十五年一月十八日第二刷発行)に「短詩評」の掲

載があり、同巻「後記」には「読売新聞の明治三十八年九月一日号から幸田露伴評と署して載つた「短詩」の中、露伴の評の存するものを採り、雑誌文芸界の同年十二月号・翌年三月号に同じく「短詩」と題して載つたものを加へた。募集当選の分は九月二十一日号以後である」とある。

まず、露伴全集第四十一巻51頁から77頁にかけて掲載された「短詩」のタイトルを提示してみることにする。「○」とのみあるもの、同一タイトルのものについては、冒頭の一節を（＊　）に示した。（　）内には露伴全集でのノンブル、読売新聞の掲載日、幸田露伴編『はつしほ』[2]再掲時のタイトルと筆者名、ノンブルを記載した。ただし、異同がない場合は、『はつしほ』掲載時のタイトルと筆者名は省略した。なお、「露伴の評」が「存する」にもかかわらず何ゆえか露伴全集未載のもの、「露伴の評」が付されていないために露伴全集未載のものも、読売新聞への掲載順に従い、該当箇所に挿入した。

釣客　漆山天童（51頁　一日　11頁）
○（＊短夜の）　斎藤素影（51頁　一日　4頁）
○（＊松は黒みて）　米光関月（51頁　一日　1頁）
山蒲桃　中谷無涯（51〜52頁　一日　31頁）
秋感　神谷鶴伴（52頁　一日　79頁）
恋　大野若三郎（52頁　一日　大野若狭　2頁）

○（＊水音に）　斎藤素影（52頁　一日　26頁）
童話　大野若三郎（53頁　二日　大野若狭　82頁）[3]
謎（雲の峯）　加藤東風（53頁　二日　雲の峯の画に題す　62頁）
冬のわかれ　村田琴伴（53頁　二日　51頁）
或ところにて　米光関月（53頁　二日　或る浦辺にて　54頁）
水車　神谷鶴伴（54頁　二日　41頁）
山里　米光関月（54頁　二日　68頁）
織女　中谷無涯（54頁　二日　69頁）
○（＊梅散る門には）　巽木鶏（54～55頁　二日　58頁）
春の怨　村田琴伴（55頁　二日　春怨　8頁）
○（＊落日の）　米光関月（55頁　三日　17頁）
○（＊酔は醒めず）　巽木鶏（55頁　三日　85頁）
鸚鵡　大野若三郎（55～56頁　三日　大野若狭　12頁）
歌　加藤東風（56頁　三日　10頁）
○（＊家暮れて）　神谷鶴伴（56頁　三日　28頁）
恋の賛　巽木鶏（56～57頁　三日　7頁）

文化文政　斎藤素影（57頁　三日　14頁）
○（＊山伏す）　巽木鶏（57頁　三日）
○（＊由緒ある）　斎藤素影（57頁　三日　48頁）
涙　大野若三郎（58頁　四日　大野若狭　34頁）
怨　同[4]（58頁　四日　閨怨　大野若狭　47頁）
甲辰乙巳　巽木鶏（58頁　四日　37頁）
深山の春　中谷無涯（58～59頁　四日　16頁）
初杜鵑　佐藤露英（59頁　四日）
○（＊西の大空）　神谷鶴伴（59頁　四日　49頁）
乙巳春　巽木鶏（59頁　四日　25頁）
神代巻（＊背に磐靱）　中谷無涯（60頁　四日　神代巻雑詠　32頁）
神代巻（＊綿津海の）　同（60頁　四日　神代巻雑詠　中谷無涯　29頁）[5]
閑居　神谷鶴伴（60頁　五日）
春　米光関月（60頁　五日　38頁）
○（＊柳の蔭に）　斎藤素影（61頁　五日　77頁）
湖辺　中谷無涯（61頁　五日　6頁）

夏の夕　神谷鶴伴（61頁　五日　98頁）
夏日　公田杳々（61～62頁　六日　9頁）
○（＊渓深く）　斎藤素影（62頁　六日　57頁）
○（＊麦黄ばむ）　巽木鶏（62頁　六日　50頁）
雨後の小川　米光関月（62頁　六日）
○（＊朝立の）　斎藤素影（63頁　六日　65頁）
神代影　中谷無涯（63頁　六日　神代巻雑詠　33頁）
紫陽花の賛　漆山天童（63頁　七日　64頁）
神代巻（＊迦具土の神）　中谷無涯（未載　七日　神代巻雑詠　30頁）[6]
少名毘古那神　公田杳々（未載　七日）[7]
偶成　大野若三郎（63～64頁　七日　大野若狭　72頁）[8]
神代巻（＊畏こしや！）　中谷無涯（64頁　七日）
○（＊石のきざはし）　神谷鶴伴（未載　七日　73頁）[9]
○（＊隣りの嫁女）　斎藤素影（64頁　八日）
○（＊風渡る）　同（64頁　八日　斎藤素影　36頁）
百合　大野若三郎（64～65頁　八日　大野若狭　78頁）

○（＊菅の根の）　神谷鶴伴（65頁　八日　19頁）
行々子　漆山天童（65頁　八日　15頁）
○（＊夕やけ雲の）　米光関月（65頁　八日）
京の水　久保田世音（65～66頁　十一日　46頁）
○（＊離れ屋の）　斎藤素影（66頁　十一日　42頁）
蜘蛛の囲　中谷無涯（66頁　十一日　93頁）
裾野　大野若三郎（66～67頁　十一日　大野若狭　96頁）
○（＊島山さむる）　米光関月（67頁　十一日）
中川　漆山天童（67頁　十一日　86頁）
○（＊午睡の顔に）　神谷鶴伴（67～68頁　十三日　152頁）[10]
夏の旅　堀内新泉（68頁　十三日）
○（＊日は長し）　斎藤素影（68頁　十三日　52頁）
初夏述懐　佐藤露英（68頁　十三日　初夏　87頁）
時鳥　卜部観象（68～69頁　十三日　18頁）
○（＊人に見られず）　中谷無涯（69頁　十三日　22頁）
○（＊往昔長者が）　神谷鶴伴（未載　十三日　63頁）[11]

○（＊空は疲れて）　米光関月（未載　十三日　81頁）[12]
○（＊雨の桜の）　斎藤素影（69頁　十三日　95頁）
初夏の若き尼　村田琴伴（69頁　十五日　若き尼　89頁）
○（＊はてし知られぬ）　公田杳々（69頁　十五日　70頁）
渡頭春　神谷鶴伴（70頁　十五日　56頁）
牝鶏　大野若三郎（70頁　十五日　大野若狭　67頁）
○（＊春風一路）　斎藤素影（70頁　十五日　84頁）
○（＊白銀の浪）　水島巴箋（70頁　十五日　水島丹崖　35頁）
○（＊星見え初むる）　斎藤素影（71頁　十五日　90頁）
宮島　米光関月（71頁　十五日　61頁）
山寺　佐藤露英（71頁　十五日　55頁）
○（＊藁屋の軒端）　神谷鶴伴（71～72頁　十六日　3頁）
○（＊踏まれた小草）　公田杳々（72頁　十六日　92頁）
人形　佐藤露英（72頁　十六日　5頁）
○（＊語る野崎に）　水島巴箋（72頁　十六日　水島丹崖　66頁）
清水　斎藤素影（72頁　十六日　71頁）

同　大島宝水（73頁　十六日　清水　39頁）
同　倉本清（73頁　十六日　清水　倉本春眠　75頁）
○（＊峠を越えて）　斎藤素影（未載　十七日）[13]
○（＊霧深き渓）　同（未載　十七日　斎藤素影　97頁）[14]
秋　米光関月（73頁　十七日　山家の秋　91頁）
初秋　斎藤素影（73頁　十七日　88頁）
今年の立秋　中谷無涯（73～74頁　十七日　立秋　53頁）
初秋　籾山東洲（74頁　十七日　24頁）[15]
秋　松岡夢鳥（74頁　十七日）
○（＊絶壁高う）　米光関月（74頁　十八日　27頁）
夕暮　漆山天童（74～75頁　十八日　43頁）[16]
老鶯　中谷無涯（75頁　十八日　83頁）
清水　巽木鶏（75頁　十八日　94頁）
田舎の夕涼　中谷無涯（75頁　十八日　59頁）
○（＊桜の社）　斎藤素影（75～76頁　十八日　74頁）
清水　堀内新泉（76頁　十八日　45頁）

○（＊夕立の）　米光関月（76頁　十九日　21頁）
山行　中谷無涯（76頁　十九日　44頁）
○（＊百舌の鳴く柿畠）　斎藤素影（76～77頁　十九日　80頁）
○（＊白雲の）　神谷鶴伴（77頁　十九日　23頁）
船上夜望　中谷無涯（77頁　十九日）
○（＊蛇籠の上に）　斎藤素影（77頁　十九日　20頁）
○（＊笠雲の）　中谷無涯（77頁　十九日　76頁）

さて、ここで漸く本論に入る。次頁、次々頁に掲げた図版は、読売新聞掲載の「短詩」を集めたスクラップブック全二十頁の一頁めと二頁めである。鶴伴神谷徳太郎の手元にあったと推定されるもので、神戸松蔭女子学院大学現蔵。反故紙を台紙として再利用しているため、一部判読しがたい所もあるのだが、墨と朱の書き入れがある。

一頁めに九月一日掲載分の「釣客　漆山天童」「○（＊短夜の）　斎藤素影」「○（＊松は黒みて）　米光関月」「山蒲桃　中谷無涯」「秋感　神谷鶴伴」があり、それぞれの上部に墨で「1」「2」「3」「4」「5」とある。二頁めにかけての「恋　大野若三郎」の上部は、墨で一度「6」とした後に抹消。一日の読売新聞紙面に掲載されていた「○（＊水音に）　斎藤素影」は脱落し、次にスクラップされているのは五日掲載分である。「閑居　神谷鶴伴」の上に朱の「△」があり、「春　米光関月」の上の墨書「7」は抹消。「○（＊柳の蔭に）　斎藤素影」に書き込みはなく、

「湖辺　中谷無涯」は、朱の「4」を墨で抹消後に朱で「5」、「白鷺」のルビ「しらさぎ」を墨で「はくろ？」と訂正している。

人は皆或る時は詩の人なり

スクラップされた全二十頁を整理しておくことにしよう。（　）内にはスクラップブックの何頁め、読売新聞の掲

載日、必要に応じての若干の注を記した。

釣客　漆山天童（1頁め　一日　上部に墨で「1」）
○（＊短夜の）　斎藤素影（1頁め　一日　上部に朱で「○」「4.5」と記した上に墨で「2」）
○（＊松は黒みて）　米光関月（1頁め　一日　上部に朱で「○」「5」と記した上に墨で「3」）
山蒲桃　中谷無涯（1頁め　一日　上部に墨で「4」）
秋感　神谷鶴伴（1頁め　一日　上部に朱で「△」と記した上に墨で「5」）
恋　大野若三郎（1頁め〜2頁め　一日　1頁め上部に朱で「4」、2頁め上部の墨書「6」を抹消）
閑居　神谷鶴伴（2頁め　五日　上部に朱で「△」）
春　米光関月（2頁め　五日　上部の墨書「7」を抹消）
○（＊柳の蔭に）　斎藤素影（2頁め　五日）
湖辺　中谷無涯（2頁め　五日　上部の朱書「4」を墨で抹消、朱で「5」、露伴評「白鷺」のルビ「しらさぎ」を墨で「はくろ？」と訂正）
夏の夕　神谷鶴伴（3頁め　五日）
○（＊隣りの嫁女）　斎藤素影（3頁め　八日　上部に朱の「？」）
○（＊風渡る）　同（3頁め　八日　上部の墨書「△」を抹消後、朱で「？」）

百合　大野若三郎（3頁め　八日　上部に朱で「3」）
○（＊菅の根の）　神谷鶴伴（3頁め　八日　四行目「長閑に」を「静かに」と朱で訂正）
行々子　漆山天童（4頁め　八日　上部に朱で「3」）
○（＊夕やけ雲の）（4頁め　八日　読売新聞には無い筆者名を朱で「米光」と記載）
京の水　久保田世音（4頁め　十一日　上部に朱で「3」）
○（＊離れ屋の）　斎藤素影（4頁め　十一日　上部に朱で「3」）
蜘蛛の囲（4頁め　十一日　読売新聞には無い筆者名を朱で「中谷」と記載　上部に朱で「2.5」）
裾野　大野若三郎（4頁め〜5頁め　十一日）
○（＊島山さむる）　米光関月（5頁め　十一日　上部に朱で「△」「2」）
中川（5頁め　十一日　読売新聞には無い筆者名を朱で「漆山」と記載　上部に朱で「2」）
○（＊落日の）　米光関月（5頁め　三日　上部に朱で「2」）
○（＊酔は醒めず）　巽木鶏（5頁め　三日）
鸚鵡　大野若三郎（5頁め〜6頁め　三日）
歌　加藤東風（6頁め　三日　上部に朱で「2.5」）
○（＊家暮れて）　神谷鶴伴（6頁め　三日　上部に朱で「△」）
恋の賛　巽木鶏（6頁め　三日）

文化文政　斎藤素影（6頁め　三日）
○（＊山伏す）　巽木鶏（7頁め　三日　上部に朱で「3」）
○（＊由緒ある）　斎藤素影（7頁め　三日　上部に朱で「2」）
夏日　公田杳々（7頁め　六日）
○（＊渓深く）　斎藤素影（7頁め　六日　上部に朱で「5」）
○（＊麦黄ばむ）　巽木鶏（7頁め　六日　上部に朱で「3」）
雨後の小川　米光関月（7頁め〜8頁め　六日　上部に朱で「2.5」）
○（＊朝立の）　斎藤素影（8頁め　六日　上部に朱で「2」）
神代影　中谷無涯（8頁め　六日）
童話　大野若三郎（8頁め　二日　上部に朱で「3.5」）
謎（雲の峯）　加藤東風（8頁め　二日　上部に朱で「？」と「3.5」）
冬のわかれ　村田琴伴（8頁め　二日）
或ところにて　米光関月（8頁め　二日　下部に朱で「3.5」）
水車　神谷鶴伴（8頁め〜9頁め　二日）
山里　米光関月（9頁め　二日　上部に朱で「3」）
涙　大野若三郎（9頁め　四日　上部に朱で「3」）

怨　同人（9頁め　四日）
甲辰乙巳　巽木鶏（9頁め　四日　上部に朱で「3」）
深山の春　中谷無涯（9頁め　四日　上部に朱で「4」）
初杜鵑　佐藤露英（10頁め　四日　上部に朱で「2」）
○（＊西の大空）　神谷鶴伴（10頁め　四日）
乙巳春　巽木鶏（10頁め　四日　上部に朱で「2」）
神代巻（＊背に磐靱）　中谷無涯（10頁め　四日）
神代巻（＊綿津海の）　同（10頁め　四日　下部に朱で「△」）
織女　中谷無涯（10頁め　二日　上部に朱で「2.5」）
○（＊梅散る門には）　巽木鶏（11頁め　二日　上部に朱で「3」）
春の怨　村田琴伴（11頁め　二日　上部に朱で「4.5」）
○（＊午睡の顔に）　神谷鶴伴（11頁め　十三日）
夏の旅　堀内新泉（11頁め　十三日）
○（＊日は長し）　斎藤素影（11頁め～12頁め　十三日）
初夏述懐　佐藤霞英（12頁め　十三日　「霞」と誤植されていたのを「露」と朱で訂正）
時鳥　卜部観象（12頁め　十三日）

○（＊人に見られず）　中谷無涯（12頁め　十三日）
○（＊往昔長者が）　神谷鶴伴（12頁め　十三日）
○（＊空は疲れて）　米光関月（12頁め　十三日　上部に朱で「4.5」）
○（＊雨の桜の）　斎藤素影（12頁め～13頁め　十三日）
初夏の若き尼　村田琴伴（13頁め　十五日　上部に朱で「2」）
○（＊はてし知られぬ）　公田杳々（13頁め　十五日　上部に朱で「2」）
渡頭春（13頁め　十五日　読売新聞には無い筆者名を墨で「神谷鶴伴」と記載　上部に朱で「?」）
牝鶏　大野若三郎（13頁め　十五日　下部に朱で「△」）
○（＊春風一路）　斎藤素影（13頁め　十五日　露伴評「寄処は無けれども」の「寄」を「奇」と朱で訂正）
○（＊白銀の浪）　水島巴箋（13頁め　十五日）
○（＊星見え初むる）　斎藤素影（14頁め　十五日　二行め「岸に茨の　花ほの白し」の「茨」のルビ「むばら」を「うばら」と朱で訂正、上部に朱で「2.5」）
宮島　米光関月（14頁め　十五日）
山寺　佐藤霞英（14頁め　十五日　「霞」と誤植されていたのを「露」と朱で訂正）
○（＊藁屋の軒端）　神谷鶴伴（14頁め　十六日　上部に朱で「4.5」）
○（＊踏まれた小草）　公田杳々（14頁め　十六日　上部に朱で「3」）

人形　佐藤露英（14頁め～15頁め　十六日　三行め「この人」を「その人」と朱で訂正、上部に朱で「4」）
○（＊語る野崎に）　水島巴箋（15頁め　十六日　上部に朱で「△」）
清水　斎藤素影（15頁め　十六日　上部に朱で「△」）
同　大島宝水（15頁め　十六日　上部に朱で「3」）
同　倉本清（15頁め　十六日　上部に朱で「3」）
○（＊峠を越えて）　斎藤素影（16頁め　十七日　「○（＊霧深き渓）」とまとめて上部に朱で「△」）
○（＊霧深き渓）　同（16頁め　十七日）
秋　米光関月（16頁め　十七日　三行め「あり〳〵」を「あか〳〵」と朱で訂正、上部に朱で「3」）
初秋　斎藤素影（16頁め　十七日）
今年の立秋　中谷無涯（16頁め　十七日）
初秋　籾山東洲（16頁め　十七日　下部に朱で「△」）
秋　松岡夢鳥（16頁め　十七日）
○（＊絶壁高う）　米光関月（17頁め　十八日　三行め「舞うて」を「廻うて」と朱で訂正、上部に朱で「3」）
夕暮　漆山天童（17頁め　十八日）
老鶯　中谷無涯（17頁め　十八日）
清水　巽木鶏（17頁め　十八日）

田舎の夕涼　中谷無涯（18頁め　十八日　上部に朱で「3」）
○（＊桜の社）　斎藤素影（18頁め　十八日）
清水　堀内新泉（18頁め　十八日）
紫陽花の賛　漆山天童（18頁め　七日　上部に朱で「3」）
神代巻（＊迦具土の神）　中谷無涯（18頁め　七日）
少名毘古那神　公田杳々（18頁め　七日）
偶成　大野若三郎（19頁め　七日　三行め「ゐたふるに」を「ひたふるに」と朱で訂正　上部に朱で「4」）
神代巻（＊畏こしや！）　中谷無涯（19頁め　七日　上部に朱で「△」）
○（＊石のきざはし）　神谷鶴伴（19頁め　七日）
○（＊夕立の）　米光関月（19頁め　十九日　四行め「しづく」を「しづか」と墨で訂正、上部に朱で「3.5」）
山行　中谷無涯（19頁め　十九日）
○（＊百舌の鳴く柿畠）　斎藤素影（19頁め〜20頁め　十九日　上部に朱で「4」）
○（＊白雲の）　神谷鶴伴（20頁め　十九日　上部に朱で「△」）
船上夜望　中谷無涯（20頁め　十九日）
○（＊蛇籠の上に）　斎藤素影（20頁め　十九日　一行め「すえて」を「すゑて」と朱で訂正）
○（＊笠雲の）　中谷無涯（20頁め　十九日　露伴評の「針線甚だ蜜」を「針線甚だ密」と朱で訂正）

一日の紙面の次に五日の紙面が続き、以下、八日、十一日、三日、六日、二日の前半、四日、二日の後半、十三日、十五日、十六日、十七日、十八日、七日、十九日の順にスクラップされていることになるが、この順序に意味があるのかどうかは不明。墨書の「1」～「7」は排列、朱書の「△」「2」「2.5」「3」「3.5」「4」「4.5」「5」は何らかの評価を示しているのだろうが、これらについても判断できる材料が無い。

朱もしくは墨で訂正されている箇所について、『はつしほ』のそれと比較してみると、『はつしほ』にもともと再録されていない露伴評を除けば、訂正が反映されていないのは、「○（＊絶壁高う）　米光関月」の一例のみで、その例外も、「輪なりに水の　泡舞うて」を「輪なりに水の　泡廻うて」と改変するのは、むしろ改悪だと考えることも出来るのである。『はつしほ』編集の一助となっていることは確かであろう。

以上で、露伴全集第四十一巻51頁から77頁にかけて掲載されている「短詩」、すなわち読売新聞の九月一日から十九日にかけて掲載された「短詩」についての検討をほぼ終えたことになるので、引き続き、同巻「後記」にいう「雑誌文芸界の同年十二月号・翌年三月号に同じく「短詩」と題して載つたもの」についての紹介を試みることにする。

神戸松蔭女子学院大学には、全集の78頁から82頁掲載分に該当する原稿十一枚と、それが露伴自身の手になるものだと証言する神谷鶴伴による「追懐」一枚が所蔵されている。

神谷鶴伴は、『はつしほ』奥付の「編輯者　最好会」の「代表者　神谷徳太郎」その人である。まずは彼の証言を確認してもらうことにする。

短詩は明治卅七八年日露戦争の頃
幸田露伴先生の創作にかゝる
別に四行詩とも称す今様の
変体とも云ふべきもの也
当時　先生の門下生　相集りて
競うて之を作り先生の選評を請ひ

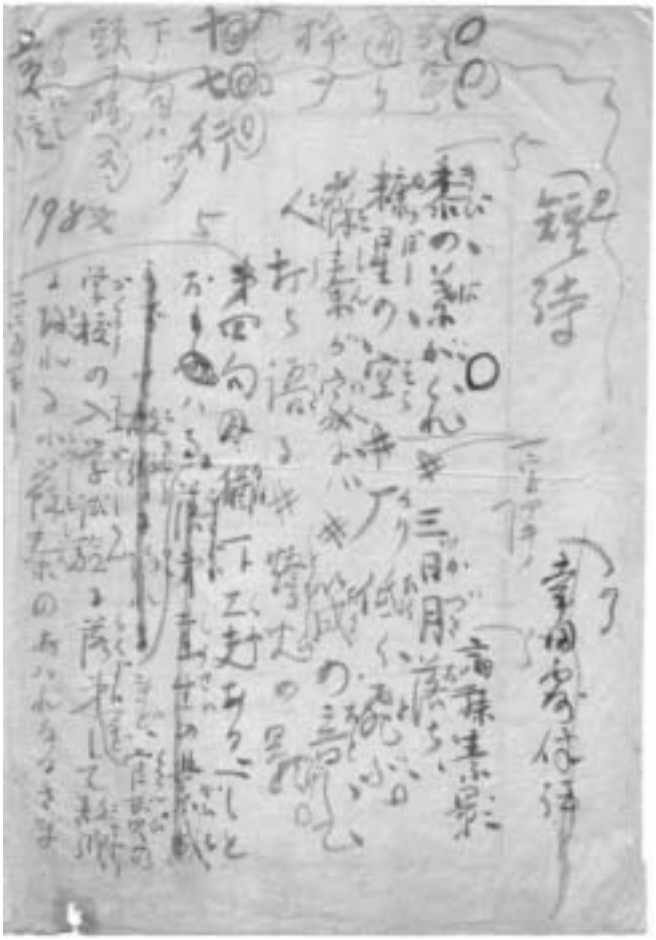
金港堂書肆より発行せし文芸界
に掲載す文芸界は余が主幹せし月
刊雑誌なり此原稿は即ち露伴先生
の書にして其後三十余年偶々筐底
より発見す当年を追懐して
感甚だ深し
昭和十五年五月　　神谷鶴伴

原稿にはそれぞれ「198」〜「208」の朱書と「文」の朱印がある。構成としては198オ〜208オで、全二十一頁（ただし未製本）ということになる。原稿における訂正後の最終本文は、露伴全集所収本文とほぼ同一。そこで、とりあえず、全集を基準にして該当する「短詩」のタイトルを列挙することにする。[17]「〇」とのみあるものについては、冒頭の一節を（＊　）に示した。（　）内には露伴全集でのノンブル、『はつしほ』再掲時のタイトルと筆者名、ノンブル、露伴全集と『はつしほ』の本文異同を記載した。異同がない『はつしほ』掲載時のタイトルと筆者名は省略している。

〇（＊黍の葉がくれ）　斎藤素影（78頁　144頁　「蘇秦が家」→「蘇秦の家」）

○（＊婆は死にけり）　斎藤素影（78頁　軍国　110頁　「ひとり」→「一人」）
夜泊　卯野木紫潮（78頁　○　13頁　「頼み無き　風待や」→「頼みなき　風待ちや」）
木曽驟雨　神谷鶴伴（79頁　176頁　「驟雨」→「白雨」、「禽」→「鳥」、「領」→「襟」）
南加利弗児尼亜海水浴場　田村松魚（79頁　遊米雑吟　136頁　「緑蔭」→「木蔭」、「巧真似」→「たくみ　まね」）
秋雨　大島宝水（79頁　129頁　「児の　突と」→「子の　つと」）
○（＊星の色）　同（80頁　夜泊　大島宝水　135頁　「光り」→「光」、「洩り」→「もり」）
○（＊狩くらの）　大野若三（露伴評がないため露伴全集未載　145頁　原稿「若三」→『はつしほ』「若狭」）
夜泊　遅塚麗水（80頁　126頁　「独り」→「ひとり」）
○（＊霧の夢路を）　米光関月（80頁　146頁　「漁り船」→「いざり船」）
雛祭　加藤東風（80～81頁　128頁　「酔」→「酔ひ」）
○（＊朧に酔ひて）　加藤東風（81頁　172頁　「此の」→「この」）
○（＊朝日に揚ぐる）　天野会心（81頁　四手網　148頁　「朝日」→「入日」、「サフィヤ」→「サフイヤ」）
一本杉　同（81頁　天野会心　166頁）
残花　筧流水（81～82頁　141頁　「葉がくれの」→「葉がくれの花、」、「花見るも憂し、」→「見るも憂し　」）
夜泊　中谷無涯（82頁　170頁）
秋の初に　同（82頁　秋の初めに　中谷無涯　142頁　「載せて」→「のせて」）

紅蕉花　同（82頁　中谷無涯　105頁　「窓陰」→「窓かげ」）



前頁の写真版は198オである。文芸界に掲載するための数多くの朱の割付指示と推敲の痕を見てとることができる。前述したように、訂正後の最終本文は、露伴全集所収本文と同一なのだが、推敲過程が明らかになるのは興味深いことである。

「〇（＊黍の葉がくれ）」の場合、露伴は最初「第四句今」と書き、「今」を削除して「猶一ト工夫あるべしとおもふ。」と書き進め、「ふ」を削除して「はる。落第書生の業成らずして故郷に帰れる」と続けた後、「。落第書生の業成らずして故郷に帰れる」を削除して現行の文章に落ち着いたことが判明する。

もう一例挙げておくことにしよう。下の写真版は原稿の206オで、「残花　筧流水」の二行め以降である。

右下の「成田」は担当植字工の名前だろう。200オ右下に「広瀬」、203オ右下に「成田」とある。

「色猶残る」の「猶」を削除して「褪め」で本文確定。朱で「盛りならぬ花を、」と評を加え始める。三行めから四行めにかけて「いさぎよさ余りありて、あはれ」とまで書き進んだところで、「あはれ」を「なさけ」とし、六行め「似たり。」を「似たらんか。」と訂正した。

206ウは、まず「云ひし西行の意を忍べば、葉隠れに残れる花をこそ、あはれさも一トしほ深し」と記したらしい。次に「忍べ」を「思へ」とし、加筆用に「摘みても」の語を用意したが、結局は破棄し、「残れる花こそなか〳〵に却つて愛で惜むべきに」と書き進めた後、一度は「べきなるべし。」と結び、改めて「なるべけれ。」と確定させた。上段の「は、西行の」〜「悲しく」と、末尾の「歌には余事ながらいかゞにや。」を加筆して完成というわけである。

以上で、粗雑ながら、神戸松蔭女子学院大学に所蔵する幸田露伴「短詩評」関係の資料を紹介し終えたことになる。もとより「露伴氏新案の一詩形」である「新短詩」について考えるべきこと[18]は数多くあるし、神戸松蔭女子学院大学に、その延長上にあるかと思われる「俳諧之連歌」の類が五冊、所蔵本としてある。後考を期すことにして、今回は『はつしほ』の序文に流用された「短詩につきて」[19]の結論部分を引用して結びとしたい。

一切の人は皆或る時は詩の人なり。たゞよく自然に返り、形式を忘れ、思ふがまゝに詠み出でんには、まことに詩の道歌の道に遠からずといふべし。

注

（1）前号「生原稿の行方――神戸松蔭女子学院大学所蔵幸田露伴関係資料――」では『有図無題』原稿、吉田洋一あて書簡等を紹介した。

（2）「幸田露伴編」は、某古書肆の目録に掲載された「初版。カバー付。帙入。極美本」の写真版による。扉題は「初潮」。奥付には「編輯者　最好会」「右代表者　神谷徳太郎」とある。「明治三十八年十二月廿二日印刷」「同年十二月廿六日発行」。神戸松蔭女子学院大学所蔵本（旧蔵者不明）は紙を貼付して二十七日発行と訂正している。

（3）『はつしほ』で、「夜べにうがちて」を「よべに鑿ちて」とするなどの本文異同がある。

（4）読売新聞では「同」ではなく「同人」。

（5）『はつしほ』で、「綿津海」を「わたつみ」、「小汀」を「小浜」とする本文異同がある。

（6）（7）露伴の評がないため露伴全集未載。

（8）露伴全集の「枯らびたる　腸ひろげ／ひたふるに　春にさらせど」の「ひたふる」は、読売新聞では「ゐたふる」、『はつしほ』では「ひたぶる」。

（9）露伴の評がないため露伴全集未載。

（10）『はつしほ』で、「午睡の顔に　蝿せゝり」を「昼寝の顔に　蝿　二つ三つ」とする本文異同がある。

（11）（12）露伴評の代わりに「無涯評」があるため露伴全集未載。

(13)「旅路の実景、おもしろし。」との露伴の評がある。

(14) 露伴の評がないため露伴全集未載。

(15) 読売新聞での「夏もいつしか　すぎの戸を／推し明け見れば　月一痕、／幾万々の　星を射て／我に何をか　告ぐるなり。」が、『はつしほ』では、「射て」が「率て」に、「我に何をか」が「秋　来にけり」と変更されている。後者の変更は、露伴評の「秋来ぬを告ぐるなるべし。」を採り入れた結果であろう。スクラップ版の段階では何の訂正もない。

(16) 二行め「長流の底　影浸す」が、『はつしほ』では「流の底に　影　沈む」と変更されている。

(17) 今回は「募集当選の分」の「短詩」は対象外とした。「門下の詩は『はつしほ』、募集のは『さわらび』といふ書名で、前者は三十八年十二月、後者は三十九年四月に刊行」(朝倉治彦「評論的随筆10 露伴の短詩提唱」露伴全集月報41　昭和三十三年七月)で、神戸松蔭女子学院大学に後者関係の資料は皆無だからだが、対象とすべきもののうち、「募集当選の分」直前にある「暮秋　物集梧水」(『はつしほ』140頁に再録)の分のみは該当する原稿がない。完全揃いではないということなのであろう。

(18) 斎藤素影は「世間では何とも言はないで済んでゐるけれど、一時四行詩といふのを言ひ出して乗気になつてをられた。あれがせめて十年間続いてゐてくれたら、吾国には和歌俳句の外に、今一つ別の詩形が残りはしなかつたと惜まるゝ」(「先生の思ひ出」露伴全集月報2　昭和二十四年七月)と述べている。

(19) 読売新聞の明治三十八年十二月十四日～十六日に掲載。『蝸牛庵夜譚』(春陽堂　明治四十年十一月十九日)に「短詩」のタイトルで再録されている。

世未だ立たざりし前の歌の姿を保へ、枯枝に鳥の止まるごとし時の句の道と加れりといふべし。人に投ずる時は詩の人なり、歌の人なり。たゞよく自然に返り、形式を忘れ、思ふがまゝに詠み出でんには、せてとに詩の歌の道に違かるまじといふべし。

明治三十八年十二月

幸田露伴